

令和 6, 7 年度 厚生労働科学研究費補助金（免疫・アレルギー疾患政策研究事業）
総合研究報告

思春期・若年成人（AYA 世代）患者におけるリウマチ医療体制に資する研究

研究代表者	森 雅亮	東京科学大学国際医工共創研究院生涯免疫医療実装講座（教授）
研究分担者	井田 弘明	久留米大学医学部内科学講座膠原病内科（教授）
	伊藤 秀一	横浜市立大学大学院医学研究科発生成育小児医療学教室（主任教授）
	梅林 宏明	宮城県立こども病院総合診療科（部長）
	金子 佳代子	国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター（診療部長）
	桐野 洋平	横浜市立大学医学部血液・免疫・感染症内科（准教授）
	清水 正樹	東京科学大学大学院医歯学総合研究科茨城県小児周産期地域医療学（教授）
	檜崎 秀彦	日本医科大学医学部小児科（准教授）
	西山 進	倉敷成人病センターリウマチ膠原病センター診療部リウマチ科（部長）
	松井 利浩	国立病院機構相模原病院臨床研究センターリウマチ性疾患研究部（部長）
	持田 勇一	横浜市立大学附属市民総合医療センターリウマチ膠原病センター（准教授）
	矢嶋 宣幸	昭和医科大学医学部内科学講座リウマチ・膠原病内科学部門（教授）
研究協力者	西村 謙一	横浜市立大学附属病院小児科/臨床研修センター（助教）
	阿久津 裕子	東京科学大学大学院発生活達病態学（特任助教）
	井上 良	昭和医科大学横浜市北部病院 内科（助教）
	井上 優子	昭和医科大学医学部内科学講座リウマチ・膠原病内科学部門内科（専攻医）
	伊良部 仁	東京科学大学大学院発生活達病態学（助教）
	岡本 奈美	独立行政法人労働者健康安全機構大阪ろうさい病院 小児科（部長）
	久保田 知洋	鹿児島県立薩南病院小児科（部長）
	後藤 美賀子	国立成育医療研究センター妊娠と薬情報センター（医師）
	笹倉 千佳	昭和医科大学医学部内科学講座リウマチ・膠原病内科学部門（助教）
	田辺 雄治郎	日本医科大学医学部小児科（助教）
	土田 聡子	秋田赤十字病院小児科（部長）
	西村 謙一	横浜市立大学附属病院小児科/臨床研修センター（助教）
	羽多野 美香	昭和医科大学医学部内科学講座リウマチ・膠原病内科学部門（助教）
	林 祐子	東京科学大学大学院茨城県小児周産期地域医療学（助教）
	樋口 秋津	国立成育医療研究センター女性総合診療センター（医員）
	平松 ゆり	大阪医科薬科大学リウマチ膠原病内科（助教）
	藤田 太輔	大阪医科薬科大学産婦人科（特務教授）
	三浦 瑠子	昭和医科大学医学部内科学講座リウマチ・膠原病内科学部門（助教）
	三島 就子	国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター母性内科（臨床研究員）
	宮岡 双葉	東京科学大学大学院発生活達病態学（大学院生）
	宮川 英子	国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター母性内科（医員）
	安岡 竜平	浜松医科大学小児科（助教）

研究要旨

本研究は、思春期・若年成人（AYA）世代のリウマチ性疾患患者における診療科間および医療機関間連携の現状を明らかにし、その課題構造を整理した上で、実践的提案および実装支援の枠組みを提示することを目的とした。令和6年度においては全国規模のWebアンケート調査により課題の抽出を行い、令和7年度においては解析の深化を通じて課題の構造化、提案の体系化、さらに診療支援ハンドブックの作成による実装支援を行った。本研究は、実態把握→課題構造化→提案→実装支援へと発展した一連の研究として統合され、AYA世代リウマチ医療体制の改善に向けた実践的基盤を提示するものである。

A. 研究目的

思春期・若年成人（AYA：Adolescent and Young Adult）世代のリウマチ診療は、小児期から成人期への移行を含む特有の課題を有することから、小児科・成人科間の円滑な連携が極めて重要となる。加えて、診療科をまたぐだけでなく、地域や施設を越えた医療機関間の連携も、継続的かつ包括的な診療を実現するうえで重要な課題である。

本研究では、AYA世代のリウマチ診療における診療科間および医療機関間連携の現状を実態調査により明らかにし、そこから抽出した課題の構造化と連携体制の強化・解決に向けた具体的な方策を提案して提示することを目的とした。

B. 研究方法

本研究班では、日本リウマチ学会移行期医療検討小委員会との合同研究とし、日本リウマチ学会および日本小児リウマチ学会の評議員を対象にWebアンケート調査を実施した。アンケート原案は、本研究班と日本リウマチ学会移行期医療検討小委員会が協働して作成・ブラッシュアップし、アンケート文面を整えWeb上に提示した。アンケートの実施方法は、日本リウマチ学会と日本小児リウマチ学会事務局へ、それぞれの評議員（1031名、110名）に対しメールを依頼した。令和6年度は中間解析、令和7年度は最終解析を行い、得られた結果を基に班内議論を通じて課題整理および提案構築を行った。

（倫理面への配慮）

本研究に参加している研究代表および分担者・協力者は、所属している施設において人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針に準じた講習と、個人情報の取り扱いにかかわる教育が義務づけられており、受講している。本研究では、調査対象が医師であり、患者個人情報を収集したり、介入したりする研究ではないため、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針の対象ではない。

C. 研究結果

1) 令和6年度において、移行期医療は一定程度実施されているものの、制度化された連携体制は未成熟であることが明らかとなった。

2) 令和7年度の解析により、課題は多層的構造（連携不足、地域格差、支援資材認知不足など）を有することが明確化された（資料1）。

3) これらに対し、教育機会の充実、連携体制整備、地域支援強化、プレコンセプションケア推進等の提案を整理した（資料2）。

4) 診療支援ハンドブックの作成により、実装可能な具体的な支援ツールを提示した（資料3）。

D. 考察

本研究の特徴は、実態調査にとどまらず、課題構造化および実装可能な提案まで到達した点にある。従来の属人的な移行期医療から、標準化された連携体制への転換が求められており、本研究成果はその基盤となり得る。また、教育・連携・制度・自立支援を包括する多面的アプローチの重要性が示された。

E. 結論

今回の「AYA世代のリウマチ診療における診療科間および医療機関間連携の実態調査とその課題の抽出」アンケートの解析にて、診療科間・医療機関間連携の課題、移行支援態勢整備の必要性、プレコンセプションケアの標準化の必要性が明らかになった。

本研究は、アンケート調査から得られた課題抽出から提案および実装支援に至る統合的アプローチにより、AYA世代リウマチ医療体制の改善に向けた実践的基盤を提示した。

思春期・若年成人（AYA世代）患者におけるリウマチ医療体制の質向上を図るためには、医療者への教育強化、地域連携体制の整備、ガイドライン等の資材の普及、プレコンセプションケア体制の構築といった多面的な取り組みが必要不可欠である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

研究成果の刊行に関する一覧表のとおり

2. 学会発表

研究成果の刊行に関する一覧表

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

